

研究ノート

中国における地域文化の観光学及び博物館学的研究
雲南省大理を事例として

板垣朝之*, 落合知子, 三浦知子
(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、*連絡対応著者)

Tourism and Museological Research in Regional Cultures of China
Focusing on Dali in Yunnan Province

Tomoyuki ITAGAKI, Tomoko OCHIAI and Tomoko MIURA
(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University, *Corresponding author)

Abstract

This paper was an attempted inquiry into the results of the survey in Dali City conducted as joint research by Itagaki, Ochiai, and Miura, over the period of two years from 2016–2018. Dali City and Lijiang City, two representative major sight-seeing areas in Yunnan possess a sense of presence with their untouched outdoor museums, and regardless of whether or not they are registered as world heritages they are celebrated as some of the few sight-seeing areas in China to draw many tourists from around the world. In this survey we thoroughly discussed points of view such as the current state of the Dali Castle district which was extremely prosperous in ancient times, the impact of its registration as a world heritage has had on it becoming a target for Japanese tourists, how the “ food ” culture of the local citizens has changed in light of the tourism, and the preservation of a continuing “ food ” tradition, among other topics.

Key words

World heritage, Old town, Famousness, Nong Jia Le

要旨

本稿は2016～2017年度の2年度に亘り実施した、板垣・落合・三浦の共同研究第2回目、大理市の調査結果をもとに考察を試みたものである。雲南省を代表する2大観光地となった麗江市と大理市は、そのまま野外博物館としての存在感を示し、また世界遺産登録の有無に関わらず世界各地から多くの観光客を集める中国有数の観光地として脚光を浴び続けている。今回の調査では、いにしえ隆盛を極めた大理市古城地区が、古鎮として当時をしのぶ姿を今日にとどめている現状、世界遺産登録が日本人観光客の観光目的化に及ぼす影響、地元民の文化としての「食」が、観光のまなざしを受ける中でどの様に変容したのかや持続的な「食」の伝統保持等の視点をもとに論じたものである。

キーワード

世界遺産、古鎮、有名性、農家楽

はじめに

『長崎国際大学論叢』第18巻に掲載した通り、本研究は長崎国際大学国際観光学科共同研究に採択され実施した、「中国における地域文化の観光学及び博物館学的研究」であり、その独創性は観光学と博物館学の融合という点にある。中国における少数民族や観光についての研究は単独の学問領域では多く研究がなされてきたが、観光学と博物館学の共同研究はあまりなされていない。雲南省は中国でも少数民族数が最多の地区であり、人類学、民族学、民俗学等多岐に亘る分野の研究者が訪れる地域であることから、初年度は雲南省麗江市と昆明市を調査地として選定した。麗江市は1996年に地震に見舞われたものの、震災後には観光産業が盛んになり、1997年には世界遺産に登録された。観光学からは麗江市・昆明市の観光産業とのかかわり、特に旅行商品化についての解明を図った。博物館学からは復興による街並み整備や野外博物館の現状と課題について調査を行った。さらに、両分野に共通する地域文化資源や衣食住に関しては、現在中国で流行している「農家楽」(日本でいうグリーンツーリズム)を調査した¹⁾。

2017年度は雲南省大理市に焦点を当てて調査を行った。大理市では大理白(ペー)族伝統建築芸術博覧園、大理市博物館、大理白族自治州博物館、大理古城、周城白族村落、大理農村映画歴史博物館、嚴家大院、喜州白族村落を調査したが、前年度の調査で明らかになった麗江市の保存と観光における問題点を踏まえ、大理市

の保存と観光についての解明を図った。

また、博物館では白族文化を如何に展示し情報発信をしているのか、博物館展示が観光に果たす役割はどのようなものかを調査した。さらに白族村落における農家楽を調査したものである。本年度の調査は2018年2月23日(金)～2月27日(火)に実施した。行程は以下の通りである。

1. 雲南省大理市の概要

雲南省は近代に至るまで人の手が届く範囲に限られ、辺境であるが故に少数民族が多く暮らす地域として、貴重な民俗・風土・自然環境等が現在まで保存されてきた。しかし、近年の中国における経済発展により、雲南省にも開発の手が入り、急激な観光地化が進むこととなった。一方で、2017年度の調査地である大理白族自治州は環境保護に積極的に取り組んでいる地域であり、2016年度の調査地麗江市とは異なる形態の観光地であった。

大理市は雲南省西部に位置する大理白族自治州の中心地であり、白族の居住エリアとしてその伝統文化が色濃く残されている地である。また、風光明媚な地域として山水如画とも称され、古くから中国とインドを結ぶ交易路の要衝として発展を遂げてきた。8世紀に唐朝の後押しを受けた蒙舍詔が地方政権である南詔を樹立したことに始まるが、その後建国された大理国(938～1253年)を合わせて500年に亘り統治したとされる。

現在の大理市は総人口数がおよそ67万人、面

表1 調査行程表

日時	行程	宿泊
2月23日(金)	福岡 上海經由昆明	昆明泊
2月24日(土)	昆明 大理(大理白族伝統建築芸術博覧園・大理市博物館・大理白族自治州博物館・大理古城)	大理泊
2月25日(日)	大理調査(周城白族村落・大理農村映画歴史博物館・才村洋人街)	大理泊
2月26日(月)	大理調査(嚴家大院・貴州白族村落) 大理 昆明	昆明泊
2月27日(火)	昆明 上海經由福岡	

積 1,468 km² で、白族自治州とはいえ漢族が半数を占め、白族は3割強、残る2割は他の少数民族となっている。大理市はかつての中心地であった大理古城と、新たに造られた行政都市下関の2つの中心的エリアから構成されている。下関は現在の大理白族自治州の行政、経済、交通の中心地である。一方、大理古城はかつての中心地であり、現在は国家級の観光拠点となっている大理古城は、かつての大理王朝の都城の上に位置している。白族が住まう大理盆地中央に位置し、東に洱海、西に蒼山が聳える西高東低の地形を呈している。大理古城は明代洪武15年(1382)に創建され、城壁に囲まれた地区は210.05haの面積である。城壁周囲は5.8km、東西南北に城門があり、城楼を有していた。

1980年代後半までの計画経済以降、急速な経済成長が進み開発による変容が進行し、それに対して歴史文化名城保存制度が設けられた。1982年に国家歴史文化名城に指定された大理古城は国の建設部の「關於加強歴史文化名城保護規制的通知(1983)」及び「城市規制条例」に従い、1988年に「大理歴史文化名城保存計画」が制定された。1990年以降は大理古城の保存が始まった時期と言える。この保存計画は古城の旧市街地を対象とし、その具体的内容は以下の通りである。

古城の歴史文化遺産の特徴と価値を分析し、保存の原則を明確にする。古城の空間構成、基盤状の街路網、自然と調和している景観などの古城の歴史的景観を保ちつつ、「古城改造」や都市計画の発展などを同時に達成する指導方針を確立する。

古城保存の全体的・総合的施策を確定する。古城西部の旧市街地の人口過密を解消すべく、東部に住宅区を中心とする新市街地を設ける。また、工場地拡大禁止、交通問題の緩和、環境汚染の処理に関する規制を設ける。

古城の歴史文化遺産の保存範囲と建設規制区域を確定し、古城と周辺に絶対保存区、厳格制限区、環境調和区の3つの保存区域を指

定する。(絶対保存区は重要文化財の18か所の建造物と史跡及びその周辺建設制限範囲、厳格制限区は南北城楼の周辺200mの区域、両側に店舗と民居が並ぶ歴史的町並み、その奥行き16mまでの範囲、環境調和区は一級環境調和区である古城西部の絶対保存区と厳格制限区の外周旧市街地、二級環境調和区は古城東部に計画されている新市街地、三級環境調和区は古城周辺の田園風光を維持するために、古城の城壁から2km以内の地域を指定している。)(陰劼・鳴海邦碩他2004年)

中国では1982年以降、3回に亘り99都市を「国家歴史文化名城」として指定し、国家レベルの「歴史文化名城保存制度」が設置された。この名城保存計画は問題を抱えているものの、現在の中国における名城保存制度の中心的な役割を果たしてきた。名城保存計画は以下の通りである。

名城の歴史的文化遺産の特徴と価値を評価し、保存の原則と重点的内容を明確にする。

都市総体計画上の保存措置(旧市街地機能の調整、土地利用の調整、人口分散、空間形態の保存措置制度)を確定する。

保存対象と保存範囲、建築規制区域の確定と、保存措置の内容及び段階整理方法の具体化。

重要歴史文化遺産修繕、公開、利用に関する計画の策定。

計画の実施、管理措置の制定。(陰劼・鳴海邦碩他2004年)

陰・鳴海らは²⁾、以上の保存計画の考察は中国の名城保存対策において重要であるとし、近代に計画経済時期に変容した都市は、この制度に基づき保存対策が講じられたとしている。名城保存に関する研究は1979年から始まり、日本においても1986年から研究されるようになった。しかし、その多くが名城の歴史的形態や景観、名城の類型化、名城の保存計画策定理論と方法に関する研究であり、中国経済の急成長と都市化の影響を明確にし、保存計画の影響について

の研究は少ない。古城大理は1982年の第1回目名城に指定された方形城壁都市であり、1988年及び1997年の2回に亘り保存計画が作成された。

中国では無形文化遺産を非物質文化遺産と表している。2003年、ユネスコに採択された「無形文化遺産の保護に関する条約」は、有形の文化的・自然的遺産を指定する世界遺産とは別に、風習・民族音楽・口伝承などの無形文化を保護する枠組みである。登録国は、日本、中国、韓国などアジアの登録件数が多く、特に中国は2011年から非物質文化遺産法を制定して非物質文化遺産の保護に力を注いでいる。

1998年、ユネスコ執行委員会における「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」規約採択以来、中国は積極的にそのリストを提出し、2001年から昆曲、古琴、新疆ウイグルのムカム（大曲）、モンゴル族オルティン・ドーが傑作宣言された。そして2004年にユネスコ「無形文化遺産保護条約」を締結し、2006年には、中国政府國務院は毎年6月の第二土曜日を「中国非物質文化遺産日」（中国の無形文化財の日）に制定した。（落合）

2. 世界遺産登録によらない観光の魅力

2016年度に行われた麗江市と近隣地域への落合・三浦との共同研究調査では、世界遺産登録と観光誘因化・目的地化との関係、世界遺産ブランドが実際に観光客に当該観光地を訪問したいと感じさせ、観光に訪れる誘因となる要素に関する考察を試みた。2017年度は引き続き雲南省の少数民族居住地区であり、かつ国内外の観光客に人気の大理市を訪問し、世界遺産登録を受けていない観光地が観光客にどのように観光目的地化されているのかに関し、主に観光学の見地からの考察を試みた。

前年の研究では、地域・都市・建造物等が世界遺産に登録されると、該当地域・都市・建造物の、真正性、希少性、有名性の3点が認証、確立され、その要素のうち特に「有名性」に一般的観光客の「観光のまなざし」が集中し、

観光への誘因化・目的地化することを明らかにした。

2017年度の調査対象とした大理市とその古城区は、落合の記述通り1980年代から観光化が進み、観光化が先行する形で保存・保護が進められた経緯を持つが、雲南省内で観光客の人気を分ける麗江市が世界遺産登録を受けている一方、大理市とその古城区は世界遺産登録を受けていない地区である。



写真1 中国工商銀行（筆者撮影）



写真2 マクドナルド（筆者撮影）

大理市は早くも漢代には地域の交易の中心として栄え、更に元代以降は雲南とチベット、ミャンマーを結ぶ交易の拠点として栄えたこの地域経済の中心であり、また雲南省の少数民族中第7位の人口を擁する白族の中心都邑であった。1980年代半ば以降は、解放後中国の安価な旅行経費と未開発な状況を保っていた同地の風光等に興味を抱いた、主に欧州地区からのバックパッカー達が多く訪問することとなり、大理市は一

躍「バックパッカーの聖地」という趣で紹介されることとなった。即ちともに雲南省内の古い都邑「古鎮」である麗江市と大理市は、世界遺産登録の有無によらずに現在の雲南省において2大観光地化していると言えるのである。

一般的に日本人観光客は世界的に見ても「冠」に魅せられる傾向が強いと言われている。「冠」とはブランドであり、「世界1」、「世界最大」、「世界最古」といった「肩書き」の事を示す。その意味で「世界遺産登録」という「冠」、ブランド化は日本人観光客にとって最も魅惑に満ちた旅行目的地決定要素足り得るものと思われる。筆者は前年の研究において「世界遺産」の持つ3つの要素の内、「有名性」こそが観光客に最も強い目的地決定へのインセンティブを与えるものとしたが、雲南省を代表する麗江・大理の2大観光地は双子の様に類似性を持ちながら、一方は「世界遺産」であり、他方は同登録がないにも関わらず同様の誘客実績を上げており、このことは大理市にはない世界遺産登録による「真正性」や「希少性」は、必ずしも日本人観光客の観光目的地決定における重要要素ではないことを暗示させる。(上写真1、2は大理市古城區における、景観に配慮した街路の現代的な造作変更の代表例である。)

3. 世界遺産に登録された観光地の訪問観光客数推移に見る有名性の影響

下記図1³⁾は、本年8月に世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のなかの「平戸の聖地と集落・中江ノ島」遺産における春日集落への訪問客数の世界遺産登録前と登録確定後の人数推移の表である。

世界遺産登録が報道された7月以降、特に夏休みを迎えた8月に過去最高を記録しているのが分かる。(10月16日現在数値) 棚田以外に主だった観光資源も無く従来ほとんど観光地として意識され、観光客が訪れることもなかった同集落に、世界遺産登録により初めて、数値は小さいながら、観光目的の訪問客が多数訪れる様になったことは明らかである。

一方図2⁴⁾は、2014年4月に世界遺産に登録された群馬県の「富岡製糸工場と絹産業遺産群」の内の主要な施設である「富岡製糸工場」への入場者数の経年推移である。

2014年4月に世界遺産登録されたことから、統計は4月以降の数値、また本年は10月末までの数値であるが、グラフは登録翌年の2015年をピークに、指定2年目以降入場者数の減少が早くも始まっていることを表し、本年度もこのままの入場傾向で推移すると50万人の大台を割り込むほどの減少である。

わずか2例の例示ながらこれらのことは、観光を目的とした誘客、観光目的地化への誘因と



図1 「かたりな」訪問者数³⁾



図2 「富岡製糸工場」入場者数⁴⁾

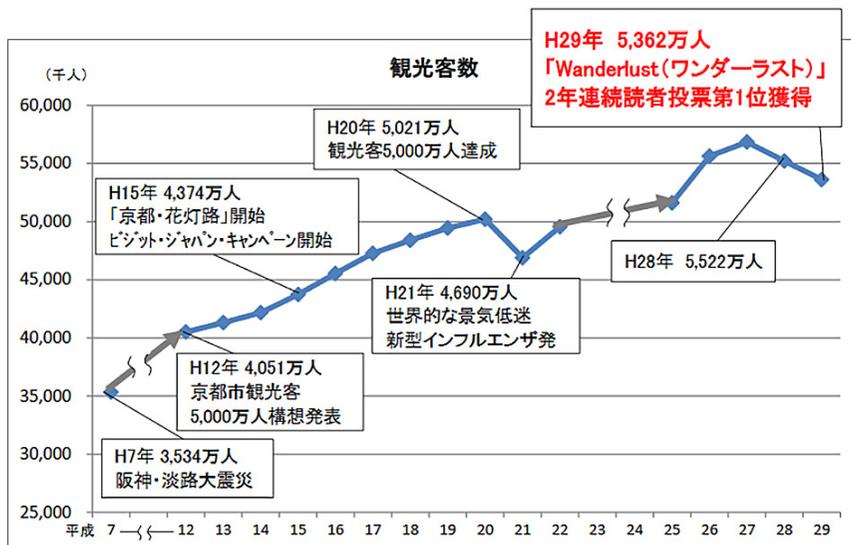
して、限られた一時期であっても世界遺産登録が極めて大きな要因として作用していることを表す数値であると理解することができる。反面この世界遺産登録効果は観光目的地化への誘因としては、ごく短期間の効果のみが期待されることの一つの暗示と言える。

一方下記図3⁵⁾は、日本の世界遺産登録都市、建造物中において、国内外への認知度で常に優位を占める京都市の観光客数の推移を表にしたものである。「古都京都の文化財」としての1994(平成6)年世界遺産登録以降、京都を訪れる観光客数は、登録効果を反映しながら、一つのピークである2008(平成20)年の5,000万人突破まで、若干の例外年を除きほぼ確実に増加の一途をたどっていることが理解できる。(平成28~29年の落ち込みは、日本人日帰り旅行者数の減少が3,764万人から3,415万人になったことが主要因である。外国人旅行者数・日本人宿泊者数はいずれも増加している。)

4.2から3の小結

以上述べてきたことをまとめると、麗江・大理という中国雲南省を代表する2つの観光地

域の内麗江市では、世界遺産登録を地域のブランドとして有効に活用し、遺産保護の見地からは疑問を残しつつも地域への流入人口拡大を成し遂げていること、また世界遺産登録こそないものの、「バックパッカーの聖地」という独自のブランドを確立・発展させ、またいにしえの古城市としての景観の保持にも流動的に対応している大理市とは、世界遺産大国である中国にあっても、単に「世界遺産」ブランドのみによることなく、観光地としての「有名性」を確立した地域の成功例ということができよう。日本国内における世界遺産登録により、各登録地では該当地域や建造物等を「観光の目玉」化し、地域活性化や流入人口拡大に向けた各種取り組みが盛んである。しかし「世界遺産」登録それ自体の観光目的地化への誘因としての力は短期的な限られた影響力に留まり、持続的な流入人口の拡大を目指す地域の「目玉商品」化するには、持続的(sustainable)な「有名性」の保持こそが実は何より重要である。「世界遺産」登録により確認され、その保護が最優先される「真正性」、「希少性」の保護と合わせ持続的な「有名性」に関する情報発信に留意し継続する



(注)平成23年及び平成24年は調査手法の変更により観光客数を推計していない。

図3 京都市訪問観光客数の推移⁵⁾

ことこそが、地域やその住民、行政に求められているとすることが出来るのである。

(板垣)

5. 雲南省の観光発展

雲南省は中国南西部に位置し、ベトナム・ラオス・ミャンマーと国境を接する。地理的にも山脈や川が複雑に存在し、このような自然条件も、少数民族の集住に影響を与えてきたと考えられ、雲南省の代表的な観光地の魅力のひとつともなっている。

1980年代初頭、対外開放都市は昆明と石林のみであり、1982年に石林と大理が「国家級風景名勝区」に指定された。その後、1984年に大理が、1985年には麗江等が追加で対外開放都市に指定されている⁶⁾。しかし、1980年代においては、交通アクセスは発展途上であり、多様となった旅行会社の中国旅行のパッケージ商品の中で、当時、雲南省内のもは、「(香港)・昆明・石林」コースの一辺倒だった。その一方で、大理は「バックパッカーの聖地」として人気を集めてきたのである。

日本では麗江を含めた旅行商品は1990年代後半から多く造成されてきた。現在は、さらに香格里拉や世界遺産である元陽の棚田が行程に入るなど、雲南の旅行商品はより多様化している。大理市に空港が開設されたのは1995年だが、大理を含む商品は比較的少ない。

また、1990年代になると、中国人の国内観光も活発化し、大理や麗江は大衆観光化していったが、大理市は麗江市と比較すると、より自然環境との調和が取れ、無理のない観光開発がなされていたかの印象を受けた。かつてのパッカバッカーがそのまま住み着いているケースも多いということだった。

なお、雲南省人民政府の統計によると、2016年の大理白族自治州の総人口は360万5千人であり、一方の麗江市は128万人である。また、農業関連の統計では、大理白族自治州の農業、林業、畜産、漁業の総生産高は388億8,300万元、

穀物栽培面積は31万8千ha、総穀物生産量は177.6万トンである一方、麗江市は総生産額が86億9,000万元、作物の総播種面積は18万9千ha、総穀物生産量は52.4万トンである。大理白族自治州では、このほか農産物の商品登録を行ったり、“一村一品示范村镇”という、いわば日本で1980年代以降に広まった「一村一品運動」に類似した動きもみることができる。一方の麗江市は、豚肉を中心とした畜産業が特徴的となっている⁷⁾。

6. 地域資源の観光資源化と観光地の魅力

地域にはさまざまな資源があり、その一部が「観光資源」となる。「観光資源」とは、さまざまな解釈があるが、日本国内での体系的なものとしては、1968年の「観光資源調査手法」等を契機として調査が実施され、評価結果をベースとした「全国観光資源台帳」が存在した。その際の「観光資源」は、「観光地の魅力を構成する要素の一つ」であり、大きく、「自然資源」と「人文資源」に分類されている。現在は、「観光資源とは、人々の観光活動のために利用可能なものであり、観光活動がもたらす感動の源泉となり得るもの、人々を誘引する源泉となり得るもののうち、観光活動の対象として認識されているものである」とされており、詳細な個別の評価の視点が提示され2014年に改訂されている⁸⁾。

このような観光資源評価軸とは別に、観光者のまなざしが新たな観光資源を生み出すこともあれば、見るものによって評価の異なる資源も多々存在する。とりわけ、近年の着地型観光での観光目的や、バックパッカーの旅などでは、滞在地域の「暮らし」そのものが観光資源になり得る。地域の農業を母体とした「農家楽」には、このような地域の暮らしの延長を「観光資源」として経験するよい機会になる。しかし、現状の中国国内の農家楽では多くは外国人を意識したものではなく、施設面でまだまだ改善の必要であることを指摘した⁹⁾。2017年度の大理市視察では、外国人にとっても魅力ある観光資

源として、以下の3点について述べたい。

白族料理のレストラン、「天龍閣白族庭院食府」

白族の建築様式と伝統的な大理料理のガーデンスタイルのレストランであり、とても洗練されていた。2007年に開業しているとのことで、白族の名物料理を味わうことができる。経営者が農家ではない点から厳密には「農家楽」ではないものの、2016年度の麗江調査で訪れた、農家楽「趙雄閣」とも店のスタイルや料理内容など共通する部分は多かった。白族の料理は、洱海（大理にある大きな湖）で取れた淡水魚をつかったものも多く、味もあっさりしている。今回は、「酸辣黄壳鱼（黄殼魚の酸辣味付け）」や、「白参蒸蛋（白人参と蒸し卵）」、「海菜芋头汤（海草とサトイモのスープ）」、「天龙秘制烤鸡（ローストチキン）」などを注文した。滞在中の印象としては、次に述べる市場でもたくさんの種類の野菜を見かけたが、全体的にも野菜中心の健康的な食事だった。

このレストランに限らず、大理市滞在中の食事は充実したものだった。中華料理とはいえ、比較的味付けがあっさりとしたものが多く、とりわけ野菜類が多いことがその理由であったと分析している。

大理市喜州周城村での青空市場

藍染工房を目的に向かった周城村に到着すると、村の中心地では青空市場が開催されていた。



写真3 青空市場（板垣氏撮影）

トマトやキュウリ、さまざまな葉物の野菜や、解体されただけの肉の塊や、淡水魚などもみることができた。中でも、たくさんの種類の果実類が販売されていた。周城村への移動途中も大理周辺は比較的平坦な土地が続き、そのほとんどが畑であることも特徴的だった。中にはイチゴのハウスなどもあり、また道路の途中に大きなトラックが何台も停車していて、その荷台にはスイカなどの果実類が積まれていた。そのまま直売されているようだった。

麗江のナシ族同様、白族も居住高度の影響で、林業ではなく、農業が主体の生活とされてきた。種類の豊富なキノコ類に加え、充実した農産物はそのまま地域の有力な観光資源ともとらえることができる。

周城村の絞り藍染工房

大理古城から20kmほど離れたところにある周城村は、藍染めで知られる。そのうちの1つの工房を訪問した。工房は質素なものだったが、中庭にかけられた藍染の布は美しく、デザインも洗練されたものが多かった。また、染料についても自然の素材を10種類以上も展示し、その内容が英語で書かれており、スタッフも流暢な英語で説明してくれた。

1984年から白族の農村を調査している横山によれば、もともと白族は伝統的に藍染めの布地を作っていたが、外国人観光客が増加する1980年代半ばには、調査地の村では老人以外は化学



写真4 染料とスタッフ（板垣氏撮影）



写真5 染める作業（板垣氏撮影）

繊維の布地で作られた服を好んで身につけていたとのことである¹⁰⁾。当時はバックパッカーや長期で滞在する比較的若い観光者が大半だったので、彼らとの交流を通じて、藍染めの価値が再評価され、藍染めの布の生産量が増大したばかりではなく、白族の藍染めに対する意識が1988年頃から変化したことを指摘している。

（三浦）

7. 地域文化資源の保護・活用と持続可能な観光

中国国内では、都市化による後継者の減少問題や、非物質文化遺産の保護に対する政策などが問題化されている。中国は文化財のみならず、非物質文化遺産も多いことから、ユネスコの「傑作宣言」だけでは不十分であり、さらなる国の保護政策は不可欠であった。このようなことから「国家非物質文化遺産登録プログラム」が開始され、民間文学、音楽、舞踊、美術、民芸、戯曲、曲芸（鼓楽、漫才、語り等）雑技、伝統医学、民俗習慣などが登録の対象となった。このうち、文物（文化財）非物質文化遺産（無形文化財）伝承人、人間国宝を国・省・市・県の政府がそれぞれ認定し、保護の等級は国家レベル・省レベル・市レベル・県レベルの4段階に分けられている。

2005年7月から2006年4月にかけて、國務院が「第一次国家非物質文化遺産リスト」の選定を行い、全国31の省、自治区、直轄市、香港、マカオから1,300件以上の申請があった。2006年

5月20日発表のリストでは計518件が認定された。また中国国内のリストだけでなく、ユネスコの代表一覧表にも多数が記載されている¹¹⁾。

2017年度の調査では、雲南省における観光化の地域差が大きいこと、住民の意識の相違点などが明確になった。今後は雲南省の他地域における地域文化資源の活用や今後の展望を観光学及び博物館学から調査を継続するものである。

また前述のとおり、「世界遺産」登録それ自体の観光目的化への誘因としての力は短期的な限られた影響力に留まるため、持続的(sustainable)な「有名性」の保持が重要となる。持続的な「有名性」に関する情報発信に留意し継続することこそが、地域やその住民、行政に求められている。

さらに、多数の観光者に支持される観光資源を維持するためには、地域でのマネジメントや、ブランド化といった手法も求められる。日本においても、例えば長野県は山地が多く、地理的な条件から稲作が困難である地域も存在した。それゆえに「信州そば」と認知される地域ブランドは構築されたのだが、子どもの頃、「貧しい象徴」としてソバを食べた経験を持つ長野県出身者が、おとなになってもソバがおいしいと思えないと語ったことがある。観光資源の新たな創出に、観光者あるいは他者の視点と評価が影響をもたらし、それが当事者の意識をも変える可能性がある。6.で述べた3つの観光資源は観光者が求める、滞在地域の「暮らし」そのものである。環境や風景の受容に大きく影響する、第一次産業に関連した地域での取り組みや施策が、持続可能な観光振興の一助となるのである。

注

1) 落合知子,板垣朝之,三浦知子[2018:101-110]

2) 陰劫・鳴海邦碩他[2004:83]

3) 池田拓朗2018.10.30講演時資料「長崎のキリスト教と世界遺産」p.17より筆者が2018年10月20日作画、作成。

4) 富岡タウンガイド協会資料より筆者が作図、作成。

<http://www.silkmill.iihana.com/visitors.php>
(2018年10月20日閲覧)

- 5) 京都市産業観光局資料「京都総合観光調査」H29年度版より転載
- 6) 松村嘉久 [2001: 31-35]
- 7) 雲南省人民政府 (<http://www.yn.gov.cn/>)(2018年11月4日閲覧)
- 8) 梅川智也 [2014: 10-19]
- 9) 落合知子，板垣朝之，三浦知子 [2018: 109]
- 10) 横山廣子 [2004: 190-193]
- 11) なお，本稿は青木豊，落合知子，中村浩，前川公秀 第4章「風土資源を活かした野外博物館の観光」[2018: 101-110]に加筆したものである。

引用・参考文献

落合知子，板垣朝之，三浦知子(2018): 中国における地域文化の観光学及び博物館学的研究 雲南省麗江と昆明を中心として，長崎国際大学論叢

第17巻，pp.101-110

- 陰劫・鳴海邦碩他(2004): 中国・大理古城における歴史的市街地の変容と保存施策に関する研究，日本建築学会計画系論文集 第583号，p.83
- 梅川智也(2014): 観光資源の評価と観光計画 我々は「観光資源評価」をどう活用してきたか，観光文化 第38巻3号通巻第222号，公益財団法人日本交通公社，pp.10-19
- 松村嘉久(2001): 中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略，大阪経済法科大学，東アジア研究第32，pp.25-46
- 横山廣子(2004): 観光を中心とする経済発展と文化：雲南省大理盆地の場合，国立民族学博物館調査報告，pp.181-203
- 青木豊・落合知子・中村浩・前川公秀(編著)(2018): 「博物館と観光 社会資源としての博物館論」，雄山閣，360p